

堺市蔵・与謝野晶子自筆原稿から見えてくるもの

古典文学をよみがえらせる晶子の方法

大阪大谷大学非常勤講師

足立 匡敏

はじめに

本日は、「堺市蔵・与謝野晶子自筆原稿から見えてくるもの」という題でお話しさせていただきます。実は、私は、今年（平成三十三年）三月末まで堺市の文化課で学芸員として勤務しておりました。その時、堺市（堺市立文化館与謝野晶子文芸館）が所蔵する与謝野晶子の自筆原稿を整理し、何が書かれているのかを一枚一枚調べておりました。本日は、その調査の中で自筆原稿から見えてきたことをお



話したいと思っています。

与謝野晶子と古典文学との関わり

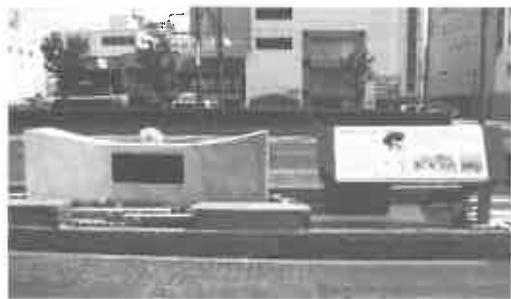
はじめに、古典文学との関わりを中心に晶子の生涯を見てゆきたいと思います。

晶子は、明治十一年二月七日、堺県堺区甲斐町の菓子商・駿河屋に生まれました(図①)。本名は「鳳志ほうしよう」と言います。生家は、阪堺電車の宿院駅の近くにありましたが、空襲で焼けてしまい、現在は歌碑が建つのみです(図②)。

晶子は、明治二十二年、十歳で堺女学校(府立泉陽高等学校の前身)に入學します。この頃から『源氏物語』などの古典文学に親しみ始めたようで、「紫式部は私の十一、二歳の時からの恩師である。私は二十歳までの間に『源氏物語』を幾回通読したか知れぬ。」(『光る雲』昭和三年)と述べています。明治三十三年、晶子二十二歳の時に、後の夫となる与謝野鉄幹が、新詩社の機関誌『明星』を創刊します。この動き



①晶子の生家駿河屋
〔『住吉・堺名所并二豪商案内記』
〈堺市立中央図書館蔵〉〕



②与謝野晶子生家跡

に晶子も応じ、第二号から作品を投稿します。

明治三四年六月、上京し、東京の鉄幹のもとに身を寄せます。八月には、第一歌集の『みだれ髪』（図③）を刊行し、十月に鉄幹と結婚します。



③歌集『みだれ髪』
（与謝野晶子文芸館蔵）

『明星』を出している新詩社では、晶子が上京した頃から、毎月の歌会とともに、『伊勢物語』や『源氏物語』を講読する勉強会が開かれており、晶子はいくつかの機会をとおして、さらに古典文学の知識や読みを深めてゆきます。『明星』と言えば、西洋の文学・美術作品を日本に紹介したことも知られる雑誌ですが、その一方で、同人達が、日本の古典文学を読み込んでいたというのは、とても興味深いことだと思えます。

明治四十年、二九歳の時には、成美女学校の中につくられた「けいしき蘭秀文学会」という女性たちのための文学研究会で、晶子は『源氏物語』などの講義を行っています。この講義には、平塚らいてう、山川菊栄らも参加していました。

『源氏物語講義』と『新訳源氏物語』

明治四二年に、晶子は『源氏物語』の全巻を評釈する『源氏物語講義』の執筆を依頼されます。依頼したのは、与謝野夫妻を支えてくれた実業家であり文学者の小林天眠です。この書の原稿は、